

周作人『木片集』訳稿 (三)

Zhou Zuoren's Mu Bian Ji: A Translation (3)

徐 小 淑*・山田 史生**

Xu Xiao shu*・Fumio YAMADA**

要旨

周作人 (一八八五~一九六七) 最晩年の小品文集『木片集』の翻訳。

サイラス

このごろ新聞を読むと、ちよくちよくサイラス (塞浦路ス) という名称にでくわす。この地名は同時にふたつの同じからざる感じを与える。ひとつは愉快的記憶であり、もうひとつは不愉快な印象である。

まず不愉快なほうから話す。イギリスはサイラス島を占領し、ギリシアに返還しようとしないう。しかも愛国的な島民に対して虐殺をおこなった。さらにフランスと手を組んで、この島をエジプト侵略の拠点にしている。これらの事実はすでに世間周知のことなので贅言を要しない。わたしが不愉快だというのは、たんにサイラスという名称についてだけのことである。というのも、この名称はイギリスによるギリシア征服の象徴だからである。

この島のもとの名はキプロス (庫普洛斯) である。現代ギリシア語でもキプロス (吉普洛斯) である。ほかの読み方はいない。ところが、ラテン語の字母で表記するようにしてから、c (克) y (干) の両字母は、英語では s (斯) a i (埃) と読める。こうなると k u (庫) は s a i (塞) と読むことになる。わたしのよな「この島はギリシアに所属すべきだ」と主張するものにとって、キプロス (庫普洛斯) をサイラス (塞浦路ス) と読むことは、イギリスがこの島を強引に占拠するのと同じように非合法なことである。しかしながら、中国における英語の勢力は強大であって如何ともしがたい。個人的に不愉快をおぼえているしかない。

キプロス (庫普洛斯) は地中海の南東に位置し、約二万平方キロの面積をもつ大きな島である。古代にフェニキア (腓尼基) とギリシアの移民によって建

設された。過去にはエジプト (埃及)、ペルシア (波斯)、ローマ (羅馬)、トルコ (土耳其) の統治するところであったが、人民および文化にかんがみて、ギリシアに属することに議論の余地はない。

この土地とギリシャ神話とのあいだには切っても切れない密接な関わりがある。愛の女神であるアフロディーテ (阿孚洛狄忒) はこの島で生まれた。アフロディーテはギリシア神話においては外来の女神であって、地位はそんなに高くないが、重要な役割をにない、絶大な力量をほこる。ホメロス (荷馬) の史詩『イリアス (伊利阿德)』には、アフロディーテがトロイア (特洛亞) 戦争の発端となったことが書かれてある。アフロディーテがトロイア王子のパリス (帕里斯) がスパルタ王妃のヘレネー (海倫) をかどわかす手伝いをしなければ、あの戦争は起こらなかった。

いにしへのギリシア詩人は恋愛をすこぶる重視したが、神話のなかで愛をつかさどる男神はエロース (厄洛斯) しかいない。かれは愛が人格化されたものであり、天地と併存するものであるとされるように、ひどく抽象的である。愛の女神は小アジアの各国に見いだされるが、みな大同小異である。フェニキアのアスタルト (阿斯塔耳忒) とアフロディーテとは似ている。キプロスのフェニキア人の紹介によって、アフロディーテはギリシアにもたらされたということが推測される。神話におけるアフロディーテは、大神ゼウス (宙斯) の娘のひとりであると云い繕われ、神の家族とみなされている。しかし一般的な見方にはさまざまある。アフロス (阿孚洛斯) という語はギリシア語で「泡」という意味なので、海の泡から生まれたという説もあるが (上品な解釈ではないので委細は省略にしたがう)、それはキプロス島のことであり、それ

* 山西大同大学外国語学部日本語講座
** 弘前大学教育学部国語教育講座

ゆえアフロディーテにはキプリス（庫普リス）という別名もある。キプロスの女という意味である。アフロディーテという呼び名は、どちらかという親しみが薄い。ローマ人はウェヌス（威奴斯）と呼ぶが、これは世間に流布している。

さほど信仰の対象になっているわけでもないのに、アフロディーテは文芸作品にしばしば登場する。そのときキプロス（庫普洛斯）に言及されると、ひとは容易にキプリス（庫普リス）に想到するのだが、そのことには愉快的な事情がある。いにしへの詩人が神話を叙述するとき、いちいち考証にはこだわらないけれども、アフロディーテがとりわけキプロスで崇拝されていることを考慮して、ここをこの女神の故郷とした。偶然にもそれはアフロディーテがフェニキア人によってギリシアに伝えられたという事実にも合っている。

愛の女神は、神話のなかでは、いつも勝利をおさめる。それと同じようにキプロスもまた自由と独立をもとめる闘争において、かならず勝利をおさめることができるだろう。サイプロス（塞浦路ス）という非合法の名は、いずれ消滅するにちがいない。声高らかに叫ぼう。キプロス（吉普洛斯）万歳、キプロス（庫普洛斯）万歳。

復辟で避難した思い出

年寄りや昔語りが好きだと世間のひとはいう。皆が口をそろえてそういうからには、そこそこ真実性があるのだろう。しかし、わたし一個人についていえば、そうでもない。

過去の六十余年をふりかえれば、まさに中国にとって多災多難の時節であった。重大な事件だけをあげてみても、甲申（一八八四）の清仏戦争、甲午（一八九四）の日清戦争、庚子（一九〇〇）の義和団事件など、帝国主義の食いものになりっぱなしであった。国内の事件としては、辛亥革命（一九一一）のあとの政情不安と袁世凱による洪憲帝政、北洋政府の権力闘争によってもたらされた張勳の復辟、一連の安徽派と直隸派との争い、奉天派と直隸派との争い、すべては北京一帯で起こったのである。

これらはみな昔々の出来事であって、幸いなるかな、三十歳以下の青年はなにひとつ知らない。われわれ老人はひたすら羨ましいばかりである。みずからの不愉快な経験に微塵の未練もない。とはいえ、ちょっとだけ見方を変えれば、いささかの見聞を有しているということは、まるっきり無益というわけでもなから

う。とりわけこれらの出来事をまったく経験したことがない青年たちにとっては、わたしが一九一七年に北京に来たとき、袁世凱の洪憲帝政の幕はもう降りていたので、じっさいに知っていることを語ろうとおもえば、張勳の復辟のことから話すことになる。

一九一七年、すなわち民国六年の四月、わたしは北京に来た。黎元洪が大総統、段祺瑞が國務總理で、二人のあいだには摩擦が生じていた。各省の軍隊の指揮官（督軍）は軒並み段氏と氣脈を通じており、こぞって支持していた。江蘇省の張勳と安徽省の倪嗣沖とが音頭をとって督軍団会議を開き、軍閥はだんだん徐州から天津へと移動し、ついに張勳はかれの辮髮兵をひきいて北京に駐在した。ちょうど乗っていた汽車が徐州を通過したとき、駅で銃をかついで辮髮をたらしめた兵士を見かけ、わたしは恐怖をおぼえた。それが今では北京にまで至り、天壇に駐屯しているのである。

当時、わたしは北京大学に附属する国史編纂所に勤めていた。ある日、わざわざ学長の蔡元培をたずね、時局についての見解を問うた。かれは是非をいわず、ただ簡潔明瞭に答えた。復辟がなされないかぎり、とりあえず北京から逃げない、と。その話しぶりは芳しいものではなかったが、いくらか安心させてくれた。記憶によれば、これは六月二十六日のことである。

七月一日は日曜日であった。夏のこととて、魯迅はかなり朝早く起き、瑠璃廠にゆく支度をしていた。わたしたちが身を置いている会館の使用人の息子がやってきて、外には龍旗がかかげられていると告げた。さして意外なことでもなかったが、いざ聴くと全身に不愉快さがはしった。詳しく書いてはいないが、当時の日記に「晩、酒を飲んで酔う。肴は銘伯さんからもらった酔魚の干物」という一節がある。煩悶している心情がうかがわれる。

魯迅の教育界の友人のなかには、さっさと逃げ出すものもいた。あるものは南方へ、あるものは天津へ。ところが三四日たつと軍閥の内部に分裂が生じ、段祺瑞は馬廠において出師の誓いをぶちあげる。復辟が消滅するのは時間の問題のようにおもわれたし、そもそも引越するだけの資力もないので、北京にとどまって事のおさまるのを待つしかなかった。

段派の李長泰の兵士がじりじりと北京に迫ると、辮髮兵はろくに応戦もせず、ただ城内へと撤退する。やがて城外の天壇と城内の南沿河の張勳の住宅附近に集まってくる。六日から城内のひとびとは避難しはじめ。恐ろしいのは市街戦へと波及することなく、辮髮兵による強奪であった。わたしたちも七日に会館か

ら城東へと避難した。日記に簡単に書いてある。数項だけ抄録してみよう。

七日。晴。午前、飛行機から爆弾が宮城へ投下。十一時に兄と崇文門内の船板胡同にある新華飯店へ転居。

九日。曇。夜、飯店は警戒態勢。銃声が聞こえたとのこと。

十二日。晴。朝四時半、銃声が聞こえる。午後二時ごろ止む。天壇などが陥落し、復辟の茶番は計十一日で終焉。晩、兄と義興局へ食事にゆく。便乗で値上がり。

按ずるに、義興局とは齋寿山君の家がやっていた店舗で、東裱褙胡同にあった。魯迅の日記の第六冊に同日の記録がある。比較参考のために供する。

十二日。晴。朝四時半、激しい戦闘の音が聞こえる。午後二時ごろ止む。事態は鎮静。デマが飛び交う。食事に難儀する。晩、王華祝、張仲蘇、弟と義興局にゆき、齋寿山をたずねて食事にありつく。

十四日、新華飯店から会館にもどる。十二日の銃声は猛烈で、たっぷり十時間はつづいた。しかし意外にも死傷者はすくなかった。ウワサによれば、空にむかって撃ったので、若干の死者は流れ弾にあたっただけらしい。東安門の三門が撤去されるまえは、いくらか戦禍の跡がのこっていた。門の西側に弾痕があった。南沿河の張公館から東南にむけて撃った跡である。焼けた張公館がまず壊され、近年、東安門も壊された。かくして復辟の戦役の遺跡をもはや目にはできない。

粘土人形

なにかの本で、ドイツのシュレイゲル（須勒格尔）博士がこんなことを書いていたのを読んだことがある。東アジアにおける人形の玩具はオランダからの輸入品をもって嚆矢とする、と。近世の「西洋人形（洋娃娃）」という呼称がその証明だというのが、およそ信じられない。

人形の玩具の起源は、はるか上古の昔にさかのぼり、それぞれの土地で自然に生まれたにちがいない。エジプト、ギリシア、ローマの古墳から発掘された象牙の彫刻や素焼きの土偶は、たいてい子どもの墓で見

つかっているから、おそらく玩具の性質をもっていたとおもわれる。それ以外にも副葬品として殉死者の身代わりにもちいた人形である「俑」もあるけれども。いずれにせよ、こういった人形の玩具の起源が特定の地域に限られるはずはない。いろんな土地で自由に発展したに決まっている。

もっとも、人形というのは外来の影響を受けやすく、いまどきの人形の服装や容貌は一般庶民（老百姓）のそれとは似ても似つかない。宋代には「摩侯羅」とか「磨喝樂」とか呼ばれた。それは外来語で、たぶん仏教と関係があるのだろうが、まだ語源はしらべていない。また『老学庵筆記』のなかで「粘土人形（泥孩児）」と称されているのは、おそらく粘土でつくった子どもの人形のことだろう。ただ別のところでは「帛新婦子」とか「磁新婦子」といった名称も出てくるが、それはある種の「美人児」であり、現代の西洋人形よりも多種多様であったことがうかがわれる。

田舎にいた幼いころ「爛泥菩薩」の玩具を買ったものである。一等賞（状元）とか和気藹々（一団和氣）などがあつたが、そのほかに婦人の玩具もあつた。それは「老嫗」と呼ばれていた。じつは「賤民（墮民）」の女性である。前朝から代々つづく賤民であつて、平民に服役するように定められている。揃ってみな昔ながらの装束である。青いスカートに青いチョッキといういでたちで、髪を「朝前髷」（平民の婦女は喪中にしか結わない）と呼ばれる高い髷に結っている。その素焼きの人形（土偶）の古い装束がどういふ身分をあらわすのか、だれも知らないもんで、たんなる老婆だと勘違いしたのである。今にしておもえば、この種の「老嫗」と呼ばれる「爛泥菩薩」は珍重すべきものであつて、保存に値するものであつたが、惜しむべし、現在ではもう目にすることができない。

歴代の「俑」は、六朝から唐に至るまでのものが数多く残っており、画家や映画制作者の参考になる。たかが人形の玩具であつても、残っていれば役に立つ。ところが玩具の副葬品は、はなはだ稀少である。さんざん遊んで、壊れたら捨てられてしまう。だから昔の玩具はめったに出土しない。実物が見つからないだけでなく、文字の記録もまた見当たらない。中国の文人はひどく生真面目で、儒教の教えに束縛され、生活の細々したことを詳述するのは些事だとおもわれることを懸念して、どうしても筆が渋ったのだろう。漢の王符は『潜夫論』に「粘土の車や陶器の犬などの玩具は、しよせん子どもだましてあつて、まったく無益である」と書いている。士大夫の玩具観を代表するもの

である。

インドの仏教経典を読んでみると、ずっと好ましいことが書いてある。『大智度論』には「ある子どもがいる。かれは汚いところで遊ぶのが好きで、泥をあつめて食いのをつくり、草木を鳥獣とみなし、それを愛する。だれかに奪われると、怒ったり泣いたりする。父はそれを理解する。子どもはそういう遊びを愛するもんだが、だんだん気持ちが離れ、成長すれば自然にやめる」とある。最後の「成長すれば自然にやめる（小大自休）」という四字は、子どもというものをよく理解した言葉である。また『六度集経』にはこんな話がある。須大拿王子が自分の二人の子どもを布施として人に与える。王妃は「わが子は玩具で遊びたがる歳ごろで、泥の象、泥の牛、泥の馬、泥の豚、雑につくったのや巧みにつくったのが、あちこち床に転がっている。これらを見るところが千々に乱れる」と悲嘆に暮れる。王妃の言葉は人情にあふれている。

子どもの幸せのためにも、玩具の制作、とりわけ人形の玩具の分野を、もっと発展させるべきである。そうすれば昔ながらの粘土人形や美人人形もさらなる発展を遂げることができる。泥の車や陶器の豚、あるいは泥の馬や豚といった昔風の玩具も、これはこれで必要なのである。新文明の玩具と同じように重んぜられるべきであって、けっして捨ててよいものではない。なるほど古臭いものではあるが、それらこそ日常生活のなかに息づいていた事物にほかならない。

玩具全般について語るつもりだったが、けっきょく人形の話しかできなかった。だから題目も宋の人がいう粘土人形（泥孩児）にしておいた。これが人形の玩具のすべてを包括するものでないことは言を須たない。

農曆と漁曆

わが国では陰曆のことを農曆という。じっさい農家専用の曆があるなら、それは現在通行している陽曆であるべきだろう。周知のとおり、農作業と気候の冷暖とは密接に関わっている。農家は節気にもとづいて作業をおこない、四季の変化は太陽にしたがっている。陽曆では、太陽と地面との遠近によって時を定め、一年を二十四節氣に分ける。ほぼ一定の期日があるので、農事にすんなり適用できる。

西洋の曆には、春と秋との二「分」、冬と夏との二「至」という期日があり、さらに一年を二十四節氣に分けている。古代より一年を「七十二候」に分けること

は、もともと中国人の創造にかかる。前者は後者よりもうんと適切で、二「分」と二「至」とのあいだの空隙をうずめて一年を平均に分配するから、すこぶる実用の価値が高い。二十四節氣の分配は太陽にしたがっているので期日がほとんど一定であり、たまにズレがあっても一日くらいである。こんな文句（歌訣）を聞いたことがある。

陽曆の節氣は数えやすい
月に二節氣と決まってる
上半期は毎月五と二十一
下半期は毎月八と二十三

たいへん覚えやすい。農家にとっても便利である。ところが世間では二十四節氣は陰曆特有のものとして誤解され、陰曆のことを農曆と称している。カレンダーや新聞には節氣をわざわざ陰曆の期日に改めて載せているものもあるが、およそ的外れである。

中国の農民は昔からずっと節氣を耕作の目安としてきた。なぜなら節氣のあらゆる四季の気候の変化は確かだに信じていることができるから。ところが節氣は太陽にもとづくものなのに、当時の中国では陰曆をもちいていたので、「月に二節氣と決まってる」二十四節氣を陰曆の年に配分せざるをえない。結果として、一年にふたつの立春があったり、閏月にはひとつの節氣しかなかったりということが、しばしば生ずる（逆にいうと、節氣がひとつしかない月を閏月とする）。一年における節氣の期日はひどく乱れ、曆でしらべなければ、まず永遠に覚えられない。

小生の意見はこうである。陽曆の二十四節氣は太陽にしたがって算出しているから正確であり、しかも期日が一定していて覚えやすく、農家がもちいるのに最適である。ゆえに陽曆をこそ農曆と称すべきであって、陰曆を引きずらなくてもよい。

陰曆は捨ててしまってもよいといっているのではない。これも古代の文化遺産のひとつだから、曆のうちに一席を占めてよろしい。陰曆は月にしたがっており、毎月一度、月が満ちる。非常に興味深い。洋の東西、時の古今を問わず、年月の「月」という字を考うるに、月とは切り離せない。生活においても月はすくなくからぬ影響をもっている。一説によれば女性の妊娠とも関係があるらしい。婦人科には不案内なので真偽のほどは定かでないが、海の潮の干満と月とのあいだに関係があるのはまちがいない。海辺に育ったので「一日と十五日との子の刻と午の刻とに潮が満ちる」とい

う成語をよく耳にした。上海が解放された年、わたしは横浜の橋のもとに寄寓していた。毎日、二階から川の水位の時節による干満をながめていると、唐の詩人・李益の『江南曲』の結句「早に知る潮に信有るを嫁するに弄潮児と与にせん」が浮かんできたものだ。

われわれ都会に住んでいるものにとって、陰暦はあまり役に立たない。海辺で生活するものにとって、それは有用である。定期的な大潮の時刻を知っておけば、それから避難したり、それを利用したりするための準備ができる。この点から観て、陰暦はまさに漁業の暦である。農歴と呼ぶひとがいるが、それは事の道理と符合しない。

（以下の文は、1963年、香港『新晚報』に載ったときに加えられた）

二十四節気は太陽にしたがっているのに陰暦には属さない。これは科学の常識である。小生くりかえし説いてきたが、この十年來、だれも取り合ってくれない。西洋の科学者某はつぎのように云っている。世のなかの道理というやつは短期間で改められるものではないが、そもそも確実な科学の原理というものは道徳や経済とは関係ないのであって、ハーヴェイ（哈耳維）が発見した血液循環説も五十年を経てはじめて世間に受け入れられたのである、と。二十四節気は陽暦であるという運動も、どうやら短期間では成功しそうにない。

『鍾馗、妹を送る』

ちかごろ文化部はかつて禁止した二十数種類の芝居を解禁した。そのなかには『大劈棺』『王魁を生け捕る』をはじめ、『鍾馗』の全部、とりわけ四川放言の地方劇（川劇）の『鍾馗、妹を送る』がふくまれている。いろいろ考えさせられる。

それにつけても鍾馗がらみの芝居だが、なにが不都合で禁止されたのかサッパリわからない。きっと迷信だからだろう。まるっきりデタラメ（鬼話）なだけでなく、たんなる幽霊の話でしかないからだろう。この芝居が『幽霊をつかむ鍾馗』という小説と関わりがあるのかどうか知らないが、もしあるとすれば全篇これデタラメということになるから、解放の初期に問題視されたのも無理からぬところである。

『鍾馗、妹を送る』は、おそらく鍾馗がらみの芝居のなかでも喜劇的な色彩を帯びた一篇なんじゃないだろうか。髪とヒゲとを逆立てた凄まじい形相の鍾馗に

は、およそ似つかわしくない可愛らしい妹がある。この取り合わせが好ましい。蘇東坡に蘇小妹があるのといっしょで、おもしろい物語がつかれる。『海上名人画稿』のなかで、こんな絵を見たことがある。たしか清溪樵子の錢恵安が描いたもので、妹は車のなかに坐っていて、幽霊が車を押している。そのうしろから鍾馗が、花の冠をかぶり、剣を帯び、ロバにまたがってつきしたが、さらにそのうしろを荷物をかついた幽霊がついてゆく。この絵につづきはないが、笑い話にはつづきがある。おおかた妹が嫁いだあとの話だろう。鍾馗の誕生日、幽霊が妹からのプレゼントをかついてきた。ひとつは酒で、もうひとつは縛りあげた幽霊である。こんな手紙がついている。

酒を一樽、幽霊を一匹、贈ります。幽霊は細かく斬り刻んでね。足りなければ荷物をかついだ幽霊も斬り刻むといいわ。

鍾馗は手紙を読むと、幽霊を二匹とも台所につれてゆくように命じる。縛られた幽霊は荷物をかついだ幽霊にいう「わしは仕方ないとして、あんたがこんな荷物までかつがにやならんとは」。この故意にひとを嘲弄するような笑い話は、明朝の本に出てくる。いずれにせよ鍾馗の妹というものがすでに存在していたようである。

神話をもちいて喜劇をつくるという中国人の知恵には、ほとんど感心する。『閻天宮』では、玉皇大帝と太上老君とによって一匹のサルがひきたてられる。『天河配』では、西王母によって牽牛と織女というカップルがひきたてられる。なにごとに対比の妙である。唯一の宗教劇『目連、母を救う』は、異常に冗長であることによって滑稽さをきわだたせ、しかも肝腎のところは一幕だけでさっさと片づけてしまう。

中国人は楽天的かつ明朗な民族であって、迷信を素材として、じつに好ましい芝居をつくる。観てしまったら、とたんに忘れてしまい、なんにも残らないような芝居、たんなる遊びとしての芝居をつくる。蘇東坡はひとから幽霊の話を聴くのが大好きで、相手がもう幽霊の話は品切れだというと、かれは「ウソかまことか（姑妄言之）」と催促したという。なにはさておき幽霊が出てくるというところに妙味がある。中国の芝居にしょっちゅう幽霊が出てくるのには仔細がある。幽霊（鬼）は怖い、その怖さは見えない。靈魂（神）も恐ろしいが、その恐ろしさは見えない。これが中国の芝居の特徴なのである。

ダルマ

ダルマ（不倒翁）は愛すべき玩具だが、どういうわけか中国ではちっとも流行らない。唐のころ、それはすでに存在した。酒席に興を添えるもので、「酒胡子」という名であった。たぶん胡人の格好をしていたのだろう。唐はいろんな民族がいりみだれた時代なので、あるいは滑稽さを表現していただけかもしれない。

三十三年前、北京の骨董屋の店先で陶器の人形を見たことがある。等身大の北朝の胡人像で、床に坐って琵琶を弾いている。六朝以降、胡人の家庭にふうに置かれたものである。ダルマ（酒胡子）が、どれくらいの大きさなのか、どうやって使うのか、いまとなってはわからない。わずかに元微之の詩にうかがわれるばかりである。

酒でストレス発散	遣悶多凭酒
ダルマをごらんよ	公心只仰胡
胸張って指さして	挺胸惟直指
ごまかす気がない	无意独欺愚

この方法は宋代にも伝えられ、『墨庄漫録』にこう書いてある。

酒席では、下を尖らせた木彫りの人形を大皿のなかに置くと、左右にゆらゆら、軽やかに舞い、力尽きて倒れる。倒れたところで酒を注ぐ。酒を勧める胡人である。

酒胡子はいずれ倒れる。ただ、すぐには倒れない。後世の作り方といっしょではないらしいが、倒れるまえに重心を利用して左右に揺れるというのは後世の作り方と似ている。「不倒翁」になってずいぶん出世したが、人当たりよく立ち回るようなイメージがあって、いまひとつ印象がよろしくない。子どもにもだんだん人気がなくなった。名称を「不倒翁」に変えられたり、また「勃弗倒」と方言で呼んだりもされたが、勃の字は正反ふたつの「或」の字があわさっており、漢字は書きにくいし、活字もないので、ひとまず省略

にしたがう。

ダルマ（不倒翁）は日本では幸運にめぐまれた。当初から「起き上がり小坊師（起来的小和尚）」と呼ばれ、玩具として愛された。「狂言」のなかでも言及されている。狂言とは軽喜劇の一種で、十二三世紀に盛んであった。中国だと南宋のころである。それ以降、「達摩」で通るようになった。太い眉、大きな目、緋色の衣を身にまとい、両足を包みこんでいるさまは、まさに「面壁九年」といった感じである。達摩大師はインドから中国にやってきて禅宗を建立した。思想史上における大立て者ではあるが、一般大衆とりわけ婦女子とははんで没交渉である。ところが日本では、ダルマさんといえば、だれでも知っている。おまけに草木虫魚、いろんなものにダルマの名がつく。形の似ているダルマ船、女性が結うダルマ髷、ひとの上着をうぼうダルマ剥がし。どんぐり眼のダルマは子どもに人気の玩具である。ダルマの「結跏趺坐」は日本のアグラという坐り方と似ており、さまざまのものに当てはめられる。ダルマはいくつものモデルに應用される。ダルマが「女ダルマ」になるのは「女菩薩」からきたのだろう。また女ダルマが子どもダルマになったりというふうに、いくらでも手軽にやれる。名称は「ダルマ」だけれども、男でも女でもよく、子どもでもよい。日本の東北地方はひどく寒いので、冬にはワラで編んだ籠に赤ちゃんをいれる。形は「ネコヤイヌの小屋（猫狗窩）」とそっくりで、赤ちゃんにとっては暖かい。鶴岡地方で、下半身は粘土でつくり、上半身の顔と服とは西洋人形の材料でつくった「不倒翁」を見たことがある。それぞれ当の地方ならではの特色がある。

ダルマはすばらしい発明だが、十分には利用されていない。中国人は「足を垂れて坐る」のが習慣になってから、さっぱり顧みなくなった。だが、あらためてこの発明を見直して、われわれの玩具文化の遺産を豊かにしてみることは一考に値する。そのさい大事なのは、大人にとって左右に揺れうごくことに意味があるかどうかということではなく、子どもの身になって新しい美を見いだせるかということである。

(2016. 1. 18受理)